

第三百二十八回 青葉会

平成二十五年七月二十五日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 小西弘子 豊田ゆたか

山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 久米五郎太 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯 橋口隆 福島正明

古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 星田啓子 村田くに子 山崎青史

山本三恵

《選者吟》 祖父たちも祭支度のストレッチ 万里子 (忠・ゆ・啓・青)

孫を待つ酔はぬ麦酒を用意して 全

野球部の点呼高らか初ナイター 全

「因みに」の多い演説戻り梅雨 全

締切り日浮雲越しに雷迫り 全

《互選句》

七点 打ち水や銀座の路地の店灯り

☆ 打水を信樂狸にお裾分け 弘子 (龍・ゆ・隆・允・啓・く・亜)

六点 ☆ 炎天や核廃絶の署名する

☆ かはほりの暮れゆく空を膨らます 弘子 (万・忠・敏・允・正・天)

五点 ☆ 魚河岸の笹の銭入れ朝涼し

☆ 検診を終えうな井をはずみけり 全 (弘・ゆ・正・く・天)

四点 ☆ 車座に鮓すし桶かこむ楽屋かな

☆ 初孫に祝詞のりと涼しく女宮司 紀久男 (万・忠・敏・天)

やまももや生徒五人の分教場 一灯 (孤・ゆ・正・く)

いくつかの思惟乱れゆく大暑かな 盛雄 (堅・紀・龍・三)

点滴の針の痛みに昼寝覚め さらお (忠・隆・允)

☆ 千穉楽浴衣で礼の若女形 紀久男 (万・恭・亜)

市川ぼたん初舞台

夏帯に黒紋付きの初々し 全 (弘・敏・く)

炎帝も一雨浴びて丸き月 五郎太 (恭・亜・三)

海の日の郡上ぐじょうの少年川へ跳ぶ 弘子 (恭・天・三)

(上五「や」で切った方がよくないか?)

抜擢の若手清すがしき夏芝居 恵洲 (紀・孤・く)

天仰ぐかつて噴水たりし鶴 全 (亜・青・三)

雲の峰水練学校在りし浜 堂哉 (恭・隆・青)

☆ ヴァイオリン弾く後れ毛や夏の夜 ゆたか (万・啓・青)

(青↓ヴァイオリンという優雅な言葉があるので

「ヴァイオリンを弾く」とした方がいい)

☆ 河童忌や父の遺せし初刊本 亜也 (万・ゆ・允)

(☆ 初刊↓初版)

二点

☆炎昼や陰なき坂を昇り切る

一人減り二人減りゆくお中元

(正↓「又一人減る中元の送り先」では?)

冷酒(ひぎ)旨し高尾の樹の風奥座敷

泣けるだけ泣いて木蔭のハンモック

夏休み暑假(しょうちゅう)と云ふと教はりぬ

☆秘島より海越え来しか揚羽蝶

陸奥(みちのく)の叫び伝ふや鉄風鈴

羅や力士避けゐる砂被り

(正↓「羅を力士が避ける砂被り」では?)

朝顔や思ひの蔓の縛れ合い

人寄せに戦車出来(いで)くる海開き

水無月や老いて句想も涸れにけり

元社長今日は掃除夫夏帽子

引き際を探し求める白扇子

一点

☆エグレスの大向ふも来る夏芝居

大暑なる洋画三本熱中す

懐しや山家で見たり渋団扇

蟄居して窓に寄せる身梅雨荒るる

夏の夕柿落しや友御簾に

軽音楽を銅鑼に代へ夏海へ

嬰児(えいじ)はや王の名を持つ大噴水

展望図の山から空へ歩く蟻

(☆↓蟻歩く山から空へ展望図)

釣ボート転覆釣果海中に

ツイッターもLINEも関せず端居する

(青↓「も関せず」は少し変だし中八になるから

単に「も知らず」としてはどうか)

老鶯のひと鳴きいとし昼の坂

玉を撞く音の間遠に夕薄暑

京土産鱧の湯引きを買ひ求め

ビキニギャルらの躍り出て海開

(隆↓海開きビキニギャルらの躍り出て)

蚊に追はれ妻の手を取り逃げにけり

紹に飽きて無双持ちたる贅好み

昼寝覺む覺束なきまま陽耿耿(ひこうこう)

夏葱を抱へ図書館本借りに

バスを待つ老軀に三十五度の夏

恭延 (万・猛)

忠彦 (堅・正)

全 (堅・敏)

孤舟 (く・天)

五郎太 (紀・三)

健介 (万・恭)

全 (堅・弘)

堂哉 (正・啓)

正明 (猛・敏)

全 (紀・龍)

天牛 (猛・孤)

全 (龍・亜)

盛雄 (孤・龍)

紀久男 (万)

猛 (紀)

全 (天)

恭延 (紀)

全 (紀)

孤舟 (忠)

弘子 (隆)

全 (猛)

ゆたか (忠)

全 (青)

全 (啓)

一灯 (亜)

隆 (紀)

昇 (隆)

規雄 (弘)

亜也 (紀)

全 (龍)

天牛 (紀)

全 (孤)

●次回青葉会

八月二十二(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

九月二十六日(木) 全

▲当季雑詠五句 投句二句

平成二十五年七月句会報

一 今回は万里子先生以下10名出席。投句11名。療養中の清さんへの寄せ書きを回し乍ら猛さんの快調な進行役で早や目に終了しました。

先生から煎餅と饅頭、弘子さんから京土産の饅頭（俵屋吉富の「八重」）、小生の純米大吟醸

「瀧自慢」（名張・赤目）：平松（旧姓 古市）さんからの楽屋見舞一升壇を賞味しつつ

淡々と推移。規雄さんのNHK TV入選句、和夫さんの病状、山口県周南の五人殺害犯、スペイン

高速鉄道脱線事故等が話題となりました。

二 関係者近詠

女神へと卯波を渡る男神かな 万里子 しみじみと畳嬉しき花疲れ 恵洲

復員の昔卓拓きし麦畑 全 「NHK俳句」七月号（四月放送）

胡桃咲く谷川べりの分校址 全 返すべき義理の数々夕涼み 正明

曾祖母と新茶くみ会う母と祖母 全 栓抜きの音久し振り壘ビール 全

よく喋るロボット掃除機梅雨晴るる 全 夕立やずぶ濡れも又カタルシス 全

片陰を拾ひ古文の輪読へ 全 「夏草の会」七月

祭来と当て子を替ふる辻地蔵 全 雲海に大胡坐かき岩手山 允章

リビングウイルは白紙のままに葉桜へ 眞希子 老鶯の声を遠くに地獄谷 全

真つ先に遠き子からのカーネーション 全 （八幡平）

教会カレーたつぷり仕込まれ降臨祭 全 海老となり水母となりて熱帯夜 青史

健やかに子を鳴かせをり燕の巢 弘子 柿落中日

濃く深く畑の休む穀雨かな 全 端役まで楽屋へ礼に夏のれん 紀久男

曇り無きコップに五月の水を飲む 全 三代の助六偲ぶ花菖蒲 全

オレンジの外灯蝙蝠疲れぬか 全 大笹の葛餅つまむ出番前 全

診療を待つ間や夏の通し風 恭延 鶺鴒に雲海を染め遠浅間 一灯

葉桜の宮より駆け抜く巢立つ子ら 和夫 炎帝の垣間見せたる殺意かな 敦雄

田植え每里山緑深まれる 全 月天心暫くそこに居れと云ふ 正明

葉桜や命ここにも親子鴨 忠彦 結論を仲々出さぬ白桔梗 全

玉三郎菊之助の二人道成寺 全 選択肢の一つは多分こぼれ萩 全

じわを呼ぶ女形の連舞花菖蒲 紀久男

烏逐ふ川鶉軍団荒けなし 全

「萬緑」八月号

八月十日

紀久男 記